

# 真宗学科における二コースの学び

——コース選択のための特別講演会——

## 主旨説明

司会…山田恵文先生

時間になりましたので、ただいまより、三コースの学びを紹介する特別講演会を始めます。いま一年生の皆さんは、来年度から三つのコースに分かれて真宗学を学んでいきますが、どのコースで学んでいくかは皆さんに選択していただきます。そのための判断材料になるようにということで、今回の講演会を設けました。思想探究コース、現代臨床コース、それから国際コースの順番で、コースにおける学びの内容を、それぞれ先生方から二十分くらいお話をいただきます。そのあと私の方から、いくつか注意点を申し上げたいと思います。それではまず主任挨拶を加来先生よりしくお願います。

主任挨拶…加来雄之先生

こんにちは。真宗学科の主任の加来雄之です。今日の説明会は、皆さんが来年度から、三コースの中のどのコース

を選んで学びを進めていくのかを決定するための大事な機会です。

配布資料を見てもらうと「真宗学科」とあって三コースについて「二〇一六年度新設」と書かれています。つまり、皆さんが真宗学科の歴史の中で、はじめてコースに分かれて学ぶ学生になります。ですから、皆さんのこれからの学びが新しい真宗学を創造していくのです。

また配布資料の中に、真宗学科の学びについて「親鸞の問いを共有し、自己を見つめ、社会を築く力を得ていく」と記されています。つまり、真宗学とは、親鸞という人の「答え」を勉強することが目的ではなく、親鸞という人が持った「問い」を共有することからはじまるということです。これは非常に大事な確かめです。ここには、親鸞という人の問い、もしくは問い方は、僕たちの持っている問いをもっとと深く深めてくれるだろうという信頼があります。親鸞という人を答えとするのではなくて、親鸞という人の問いを通して、今、僕たちがこの社会に生きている意味をしっかりと学んでいく、これが真宗学であるという確かめがなされているのです。

来年から真宗学科における皆さんの学びは三つのコースに分かれていきますが、三種類の真宗学があるというわけではありません。配布資料の一番下に、君たちの先輩がこれまで書いてきた卒業論文のさまざまなテーマが挙げられています。これらのテーマを見ていくと、先輩たちがさまざまな関心、さまざまな課題をもって真宗を学ぼうとしてきたかが分かります。

時代によって、社会によって、その人の性格や、生きてきた経験によって、人の関心や課題は、当然異なってきました。親鸞という人が生きた時代と、ぼくらの時代では、社会や時代の問題はまったく異なっているかもしれません。しかし、どんな時代でも、どんな社会でも、どんな生き方であっても、共通していることが一つあります。それは、ある時代、ある社会の中で、その問題を本当にきちんと正しく受けとめる自己を確立すること、そして、さまざまな人たちとともにその問題を引き受けていくことです。このことは、どんな時代でも、どんな社会でも、変わらない課

題ではないでしょうか。親鸞という人は、そのような課題を「真宗」と呼んだのだと思います。この課題を三つのコースは共有しているのです。

人間関係の問題で悩んでいる人もいる、病気で苦しんでいる人もいるでしょう、思想や人生観の問題に悩んでいる人もいるでしょうし、現代社会の問題に関心をもつ人もいるでしょう。問題関心が異なれば、それに対するアプローチの仕方も異なります。つまり三つのコースといっても、このアプローチの仕方に応えたいということなのです。みづからの問題関心を、どのコースで学べばよいのか。このことについては、これから、それぞれのコースを代表する先生がたが説明してください。よく聞いて、あと三年間、自分たちが学ぶ方向を決定してもらいたいと思います。一度コースに入ると、簡単に変更することはできませんので、それぞれの学び方をよく受けとめて、自分の関心をもっとも深めてくれるコースを決めてください。

繰り返しになりますが、皆さんは、コースに分かれて真宗学を学ぶ初めての学生です。つまり教員もコースで教えるのは初めてなのです。学生の皆さんも手探りでしょうし、教員も手探りなのです。けれども、決められた線路を進むのではなく、まだ見えない道を探っていくとき、そこにエネルギーでダイナミックな学び方が創造されてくるのではないのでしょうか。

その期待をもって、僕も、皆さんと一緒に、三人の先生がたによる三つのコースの学び方に耳を傾け、みづからの真宗の学びを見つめ直したいと思います。

### 思想探究コース

司会…山田恵文先生

加来先生ありがとうございました。それではさっそくですけれども、思想探究コースに関わる講演をお願いしてい

ます一楽先生からお話をお聞きしたいと思います。

### 思想探究コース…一楽真先生

こんにちは。一楽といいます。私は大谷大学の真宗学に入學して、あつという間に四十年という時間が経ちました。いまも主任の加来先生からお話がありました通り、三つのコースといっても、同じ真宗学の学びを進めるということは変わりはありません。でもどの切り口からどんなアプローチで学んでいくかということをして二年生になるにあたって具体的に決めてほしいと思います。そういう意味で、学科の教員もそれぞれのコースにいろいろなかたちで関わるわけです。後からお話がありますが、国際コースということになると語学が心配な方もいると思います。でもそれはどのようなふうにするかということも、お話していただけたらと思います。それから現代の問題に関わりたいという人は、現代臨床コースがありますけれども、どういう関わりで真宗を学んでいくかが大事になると思います。三つが全部関連していますので、区切ってしまうことが大切です。それから先生方も、十何人いますけれども、どのコースの先生だというように分けないようにしておいてほしいです。どの先生も真宗の学びをすすめておられるので、いろいろな先生に相談しながら決めていただけたらと思います。

資料を一枚配っていただいています。ここに思想探究コースというのが真ん中の左側にありますね。一回読んでみますと、「親鸞の著作をはじめとし、親鸞思想の源にある浄土三部経、七祖の聖教などの文献を読解することを通して、親鸞の思想を探究していきます。宗教的関心をもつ人、また、真宗の歴史や典籍の研究に関心を有する人などが集い、各自の課題に応じて真宗の学びを進めます」、こういうふうに書いています。

いわば真宗の文献、これを読解していくことが一番中心になる、そういうコースです。先ほど主任の加来先生が仰った通り、ここに大きな字で書いてある「親鸞の問いを共有し」というのが、とても大事ですね。親鸞も実は、人間

にとつての真宗をあきらかにしようとした。何が本当に大事なことなのかを問うた人なんです。これが答えだといふふうに握ったわけではありません。ある程度のところを通じても場面が変われば、変わらざるを得ないこともある。表現を変えていかないといけないこともある。親鸞の『教行信証』はその意味で、晩年にいたるまで筆を入れ続けた、そんな本です。

たとえば念仏が大事ですという一言ですむなら、その一行でいいわけですよ。でもどういう意味で大事なのかを説明すると、どうしても二行、三行になるでしょう。それをもっともっと詳しくいうていくと、大きな本にふくらんでいくことになります。だから、念仏に対して、疑問が呈せられれば、それに対してまた応答するということがある。批判が加えられれば、さらに踏みこんで応えないといけないこともある。

そういう意味で、一応は七十五歳で完成したとみることができると本なんですけれども、八十歳半ばになってもまだ筆を入れ続けていくんですね。だから、これで真宗をあきらかにする仕事は一丁上がりというか、終わったということにならなかった。これが親鸞という人の一生だと思います。それをある先生は、『教行信証』は未完成だ」と仰った。未完成というのは不十分という意味ではありません。これは人間の問題が次から次と、新しい問いが出てくるのに応じて、また展開していく。歩み続けていかなければならない、そういう本だという意味なんです。

ですから八百年前に親鸞は『教行信証』を書きましたけれども、これで答えが出てしまっているわけではありません。私たちは現代において、現代の問題の中でどう考えるかということを探ねていくのです。そういう意味で、できあがった本の答えを覚えるのではなくて、いまの問題を通してながら読むということを待っている、そんな本なんです。

それは実は親鸞という人がやった方法でして、もう「演習Ⅰ」でも聞いていると思いますが、「聞思して遅慮することなかれ」という言葉が『教行信証』の冒頭に出てきますね。「聞く」、これを「聞法」といふふうにいいとい

思います。「思」の方は、いろんな言い方がありますが、「聞法思惟」と、こういう言い方で先輩方はおさえています。聞くというのはまず、自分に先立って悩んだ人、親鸞でいえばインドで起こった仏教が中国を通り、そして朝鮮半島を経て日本に伝わった。その時代の中で民族や国は違いますが、自分に先立って悩んだ人がいたわけですね。そこに生き方をどう見つけていかれたか、何によってどのような生き方をしていたかを聞いたんですね。でも聞き覚えただけだったら、ただの人まねですね。私はどう生きるのか、それをどうしても考えないといけません。だから先達の生き方、先人の悩み、苦しみを通してながら、今度は自分はどう生きるのかを考えていく。これが聞法思惟、聞思というふうなことができると思います。

ただ聞くだけの勉強ならば、一方的に知識として注入すればいいでしょう。真宗の辞典を「あの段」から「あの段」まで覚えれば、真宗の用語については全部マスターしたということになるでしょうね。しかしそれにいくら詳しくても、私はこの時代の中でどう生きるのかということになると、聞思の思という、これがどうしても必要になるわけがあります。

その意味で、基本は親鸞聖人の著作を読んできますけれども、親鸞聖人が仰いだ、親鸞が尋ねていった、そういう先達の著作を読んでいくという、これがどうしても思想探究の際には不可欠になります。お経はもちろんでありますけれども、親鸞は決して、仏教經典に限ったわけではありません。そういう意味で後の国際仏教コースなんかも、そこがメインになると思いますが、現代の問題をほかの人たち、外国の人たちはどう考えるだろうか、対応させながら考えていく。そんなことが、たぶん、お話の中に出てくると思います。

一応、思想探究コースの目安をまとめたものを書きました。繰り返しになりますが、親鸞聖人自身が真宗ということとを問い尋ねていかれた。こういう人と見て、親鸞聖人の学び方を学ぶ。これが先ほどの加来先生の言葉でいえば、親鸞について学ぶのではない、親鸞について詳しくなるのではないということです。ただ親鸞聖人の学び方を学ぶと

いう場合、どうしても親鸞聖人の著作を読まないといけませんよね。読まずに親鸞聖人の学び方を学ぶということになりたちません。ですから、たとえば今「演習Ⅰ」でも、あるいは「専門の技法」でも、その学び方、それに慣れるためにいろいろな仏教用語にも親しんでもらう、そんなところから始まっているわけです。

野球でたとえれば、キャッチボールしたこともないのに、いきなり試合に出てホームランを打つわけにいきませんね。どんなことでもそうだと思います。基礎練習ということなしに、試合はできませんよね。しかし基礎練習だけやっていればいいという話でもない。やっぱりそれは実践の話なんです。ですから真宗学はどこまでも、生き方のことを学びます。親鸞聖人の生き方、それを先達に学んでいくのです。

ですから、日本人の日本だけの仏教ではありません。親鸞聖人自身がインド・中国・朝鮮・日本という時代や民族が違って、いきてはたらいっていた、そういう仏教を見たということを大事にしたいんですね。それで、いま配った紙の上の方に三コース共通のことが書いてあります。一回読みます。

「学科の目標」としましては、「釈尊の教説や親鸞の著作などに依り、人間を問うとともに、親鸞思想とその思想的背景の研究を進め、仏教精神に基づく豊かな人物の育成をめざします」。これはパンフレットなどにも書いてあります。

学科はどんな学生さんを求めているか、どんなふうになってほしいと思っているかということを簡単に、次に「学科が求める学生像」として、「人間にとつての真実とは何か。他者と関わりながらどのように生きていくか。このような課題を共に問い、尋ねようという意欲を持っている人を求めます」。これも、入学案内などに書いてあります。問いを持って、他者との関わり、どう生きるかということを、実際問題として考えてほしいということです。それで「コース分け」ですが、「学科の学びを明示するために三コースを設けます。どのコースも親鸞の学び方を学ぶ」のです。ここは共通でありまして、「問題関心の違いによって、文献を読み解いていく切り口」、このアプローチ、切り

口が違うだけです。どこから読んでいくか、どの関心によって親鸞に学んでいくかということで、親鸞が取り組んだように、聞思という姿勢を三コースとも大事にしてほしいということでもあります。

それで特に「思想探究コース」の方ですが、「趣旨」として、「文献読解に基づいた宗教的考察を中心とする真宗の学び」と、まとめてあります。

まず文献読解、これはどうしても必要となります。さつきキャッチボールのたとえを出しましたが、古文や漢文は否応なしに読まないといけませんね。それを抜きに親鸞のものを考えようというのはちょっと無理です。だからこれは、早めにやらなければいかんと腹をくくってもらって、そして古文漢文に取り組むぞという意欲で、親鸞の書いたものを直接読めるようになってほしいと思います。まだ見たことないかもしれませんが、親鸞の自筆のものがたくさん残っていますので、それをじかに読んでもらおう。漢文のものは漢文で読んでもらいます。

「対象」は、今いう必要ないかもしれませんが、一応読みますと、「浄土教や親鸞思想を学びたいと希望する者<sup>ひと</sup>」。あるいは、「親鸞の著作を通し、親鸞の思想および学びの方法を尋ねたいと希望する者<sup>ひと</sup>」。あるいは、「大谷派寺院子弟で、大谷派教師資格の取得をめざす者<sup>ひと</sup>」。これは三コースともです。それから四番目に、「卒業後も研究の継続を希望する者<sup>ひと</sup>」。研究継続して、将来研究者になっていきたいという人はやはり、文献読解ということを中心に据えていただかないといけないと思います。

次のところは、「中心となる課題」ですが、大きく分けて四つあります。

一つ目がさつきからお話している、まずは「親鸞の著作を読解する」。これが基礎になります。親鸞がどんな書物を引用しているか。どんな書物を学んでいたか。これは中身を読んでいると、自ずと背景が浮きでて見えてきます。だから親鸞はその膨大な本の中から、なぜこの文章を引用したのだろうか。なぜこの文章に感動したのだろうか。こういうことを考えていくことが、親鸞のいわば学び方を学ぶことにつながると思います。だから単に親鸞の著作に詳



しくなるという意味ではなくて、学び方を学ぶという意味でも、まずここから始めてほしいということなんです。四年間ですから、あれもこれもというわけにいきません。どこに中心を置くかということで、あと、二番、三番、四番、こちらに関心を持つ人もいると思います。これも思想探究の中に位置づけられるので、そこに挙げております。

二つ目が、「親鸞が仰いだ聖教を読解する」。例として、浄土三部経であるとか、七祖の著作などです。七祖というのはもう習っていますよね。インドの龍樹菩薩から始まって、そして日本の法然上人にいたるまでの七祖です。この方々の著作、これを親鸞は本当に縦横無尽に読みぬいていますので、親鸞が何をそこに仰いでいたか、こういうことを尋ねていくには最低でも、読む必要があります。ただ、あれもこれとはいかないと思いますので、たとえば曇鸞大師に関心を持ちましたとか、源信僧都に関心を持ちましたという形で、思想探究として進めてほしいということです。

それから三番目が、「真宗関係の典籍を研究する」と書きました。これは同じことのように聞こえるかもしれませんが、いわゆる書誌学といわれるもので、書誌学の専門家を養成するわけではありませんが、書誌の情報はとっても大事です。たとえば親鸞の著作でも、何歳頃に書かれたものなのか、あるいは誰に向けて書かれたのだろうか。こういうことを一つ考えるだけでも全然違います。皆さんでもそうじゃありませんか。一つの文章を書くときに、誰が読むかわからない雑誌に文章を載せる場合と、ものすごく親しい友達にメールを出す場合と、文章は自ずと違いますよね。誰が読むかわからないものはやはりちよつと気をつけて書かないといけない、誤解されないような配慮をしないといけないということが当然あります。だから書誌情報というのは、いつ頃書いた、どんな本かということを、きちつとおさえる、こういうことです。

この辺がさらに進むと、この中にも来年取ろうと思っている人があるかも知りませんが、博物館の学芸員の資格に関わってきます。これは、真宗関係でそういうことに興味のある人は是非とも取ってほしいと思っていますが、

たとえば掛け軸の片付け方とか、巻物の巻き方とかですね。あるいはくずし字の読み方とか、知るだけで全然違います。これは他の二つのコースというわけにいきません。博物館の学芸員資格と連動しながら、勉強をすすめてほしいところです。皆さんのお宅、お寺であれば、いろんな法宝物もあると思います。それが自分のところにあるのに、読み方も知らなければ、片付け方も知らないというのは、ちょっと情けないと思います。そういう典籍、文献について、研究を進めていくという、これも思想探究コースの中の一関心事になろうかと思っています。

四番目に「真宗教団の歴史を研究する」と書きました。教団史というところは歴史学科にも専門の講義が設けられていますので、そっちを取ったりしますが、親鸞以降の本願寺の歴史、こういうことも知らないといけないということは起こってきますね。そういう歴史のことに関心がある人は、それを中心に学びを深めてほしいですね。親鸞にまで届いてきた仏教が、今度は親鸞以降どんなふうに展開したのか、あるいはかたちを変えたのか。こういう問題もあります。

もうすでに取っている人もいるかと思いますが、真宗の歴史には差別問題をいろいろと起こしてきたということもあるわけです。人間の解放というか、本当に傷つけあうことを超えることを願いとしてきた、そういう親鸞聖人の教えを学びながら、結局、仲間と仲間でないものを分けへだてするということが起こったりしたわけです。それも教団の大きな歴史であります。そういう歴史についても学ぶことによって、なぜ親鸞聖人の教えが、こんなふうになっただけでいってしまったのか。そういうことを歴史を通して考えるということもあるわけです。そういうことも、文献を読んでいくときの課題になるかということも四番のところに挙げました。

あと、卒業論文の題目の例として、四つほどグループに分けていますが、これはいまの四つに対応しているわけではありません。いままで出たものをいくつか思想探究コースに当たると思うものを、こういうものが予想されるといふことで、例として挙げております。たとえば一つ目のグループは、『教行信証』はなぜ書かれたかから書いてい

ますが、これは『教行信証』を読む中からこういう課題が出てきたと思います。二つ目のグループ、これは「歎異の精神」という言葉から始まっていますが、『歎異抄』を読む中からこういう課題が出てきた。そういうふうに見ていただいたと思います。三番目は『観無量寿経』の研究」とありますが、たとえば浄土三部経の一つ、『観経』について研究しようという関心です。そういう意味で七高僧や、三部経のもの、これを三つ目のグループにまとめています。歴史的なことに関心のある人もいます。それから書誌的な、博物館の学芸員資格に関心のある人もいます。と思います。これも全部、思想探究コースの中で進めていくことができますということを示しておきたかったわけです。

ただ初めにいった通り、三コースは、どこから自分の学びを進めるかという意味で一步踏み出して、決めていただく必要があります。他をやらなくていいとそんな話ではもちろんありません。実際、親鸞のことを勉強して、お寺に帰っていくという人も多いと思いますが、お寺に帰ればどうしても人が亡くなっていくという現場に向きあわないといけない。病気で苦しむ中で、たすかるとは何だろうかという、そういう人間の救済の問題を問うことにもなります。この辺を中心に担うのは現代臨床ということになるかもしれません、思想探究ではそういう問題は関係ない、そんなことはありません。お聖教を読めば読むほど、自分の生き方、そして他者とどう向きあっていくかということが、どんどんどんどん、大きくふくらんでくるというふうに思います。

そういう意味では思想探究コースに進むときには、文献の読解ということ、これが一番中心になりますよということとを、腹をくくっておいていただきたいということを、今日は初めに申し上げておきたいと思います。

## 現代臨床コース

司会…山田恵文先生

一楽先生どうもありがとうございます。続きまして、現代臨床コースの説明を木越先生お願いします。

### 現代臨床コース…木越康先生

こんにちは。僕の方からは現代臨床コースの説明を簡単にさせていただきます。

いま一楽先生も仰ったように、真宗学科の三コースは、三つバラバラにあるわけではありませんし、また特に現代臨床や国際のコースなども、親鸞思想の探求を抜きにして個々に独立して成立しているものでもありません。親鸞思想を中心として、当然ひとつのものであります。ではなぜ敢えて現代臨床と国際を分けてコース立てするのかと言いますと、それは新しく何かを始めるわけではなくて、これまであつた真宗学的な関心をより見やすくするために、それぞれを切り出したのだと考えてくださったら結構かと思います。ですから、現代臨床コースに進んだから思想探究をしなくてもいいとか、国際に進めば親鸞思想を学ばなくてもいいということではありません。ただ、特にどの辺に力点を入れながら演習を行い、学修成果を表現するのかということ、それぞれのコースに違いがあるということになるでしょうか。そのあたりのことを、私は特に現代臨床コースに関してお話しします。

「現代臨床」という言葉を初めて聞く人も多いかと思えます。もちろん「現代」と「臨床」という言葉から成ります。「現代」は、今の時代ということですが、難しいのは「臨床」という言葉ですね。「床（とこ）」に「臨む」と書きます。「床」という言葉の意味はわかるでしょうか。皆さんの場合は、ベッドですかね。別の言葉で臨床は、ベッドサイド (Bedside) ということになるでしょうか。寝台 (Bed) のそば (side) に臨むというような意味になります。

ね。もともとこれは、医療施設、クリニック（clinic）に関わる言葉です。お医者さんと患者さんの関係を想定していただければいいかと思います。お医者さんや看護師さんは、ベッドの患者さんのそばに臨んで、実際に治療等の対応を行いますよね。ああいう場面が「臨床」という言葉が持つ意味です。それが床に臨むということです。そもそもクリニックとは、診療行為を指します。治療行為、診療行為です。医師や看護師さんは、苦しむ人々、病んでしまった人々の床のそばに臨んで、それらを癒すというお仕事をなさっておられますね。真宗学科の「現代臨床」も、基本的には同じ方向性を意図した言葉であると言えます。しかし真宗学科で臨床というのは、患者ではなく「現代臨床」ですから、「現代」ということがらが臨床の対象になるわけです。現代という時代やその社会に臨もうとするわけです。もう少し言えば、現代という時代の苦しみや社会の悩みに、真宗として実際に臨むということの意味する言葉、これが「真宗学科現代臨床コース」です。もともとは英語で、コンテンポラリー・ブッディズム（contemporary Buddhism）とすることを想定しています。直訳すれば「同時代的仏教」となるのですが、それではわかりませんので、「現代臨床コース」としてあります。

現代社会はご存知のように、様々な課題を抱えています。多くの人々が、それぞれの状況にあって、様々な苦しみ悩みを抱えて生きておられます。ですから現代臨床は、そのような苦しみのそばに臨んで思索するということが、学びの主眼となります。このような関心からの仏教研究は、実は多くの先行があります。ただそれらは「臨床」という言葉ではなく、別の言葉で表現されることが多くあったかと思います。最も有名なのは「エンゲージド・ブッディズム（engaged buddhism）」という用語で表現されるものでしょうか。エンゲージというのは、「関わる」とか「携わる」「従事する」ですね。「エンゲージリング」というのもそうですかね。婚約指輪です。ですからあれは大変です。婚約、いわば契約指輪ですから、相手と一生「関わる」という決意がいります。そのように、あらゆる他者の苦しみに関わろうとするのが、エンゲージド・ブッディズムです。これは「社会参加型仏教」とか「行動する仏教」という

ふうに通常は翻訳されるようです。

ですから、現代臨床コースも、基本的には大変な決意が必要になると思います。相手もしくは現場と、「関わり」を持たなくてはならないわけです。他者への関与が必須となるわけです。しかも本来は、一生涯、その相手と、あるいはその課題と関与し続けるということにならなければならないわけです。エンゲージには「引き込まれる」という意味もあるようですが、引き込まれて離れることを許さないものが、そもそも何がしかの課題に関わろうとするときには起こってくるはずです。それがエンゲージということ、また臨床ということになるでしょうか。現場に引き込まれて、そして関わり続ける、というような大切な意味になります。

本来的にはそのようになるのですが、ただ大谷大学の真宗学科現代臨床コースは、今のところ直接的に「社会参加」や「行動」ということを想定したコースではないということ、そして大変残念なことですが、生涯にわたって特定の課題に関与し続けるという責任を持つことができない形でスタートさせざるを得ないということは、みなさんにはじめに言うておかなければならないと思います。つまりこのコースに進んだみんなは、実際に行動したり、参加したりということが、学修の直接的な内容になるわけではないということ、そして本来は生涯をかけて関与し続けることはならない事を、学修的に仮につながりを持つことを許していただく立場であるということ、事前に了解しておかなければならないと思います。そのあたりのことは、専攻する人には注意してもらいたいと思います。

これはもちろん、実際の行動を否定するということではありません。例えば演習として、そこまでの責任が追いきれないということの意味します。確かにエンゲージなんです、社会的課題に関わるというよりもまず、課題そのものの中に、学生として、仏教や親鸞思想を学ばせていただくことに主眼が置かれることになります。繰り返しますが、臨床ですから、関わるのなら本来は生涯、責任をもって関与する覚悟と準備が必要なはず。もちろんコースに入って実際に学ぶ中から、直接的に行動に移したり、将来的に自身の課題として背負っていく人も生ま

れるかもしれません。しかし今の段階では、そこまでの責任を背負えるほどの準備が、おそらくはお互いに不足しているかと思います。ですから、あくまでも「学びとしての臨床」ということになるのでしょうか。ただ、実際に演習等で向き合う課題には誠実に、問題の本質をきちつと捉え、その中で思索するという訓練を重ねなければならないと思っていますし、実際にそこがコースの主眼となるでしょう。ただし、諸君は真宗学科の学生であって、真宗の学びを専門におこなっておりしますので、当然「真宗」やそれを指し示そうとする親鸞思想が、あらゆる問題を考える時の基盤とならないと困るわけです。あるいは現場に学ぶ中から、真宗の思索を積み上げていかなければならないわけです。これが、思想探究と無関係に現代臨床があるわけではないと冒頭に申し上げたことです。

ですから、基本的には二回生や三回生の皆さんに「現代臨床」は難しいのだと思います。何が難しいかというと、さまざまな現代的課題の中で真宗を学ぶということ、これが難しいと言いたいわけです。取り上げる課題に対して真宗の立場からどう考えるべきなのかについて議論する、あるいは逆に、直面した課題を通して真宗の学びを深めなければいけないわけです。その時に、いったい何が「真宗」であるのか、おそらくは皆さんの内にまだ十分に成熟していない部分があると思われるわけです。

ですからその部分については、先ほどから繰り返し申し上げますように、思想探究ということが同時に成立していなければならぬわけです。ですからこのゼミに出て、社会的課題の中で思索するという作業に参加すればいいというだけではなく、思索の土台となる親鸞思想、その探究をきちつとやれなくてはならない。その上で、現代的な諸課題に臨床的に関わるということになるかと思えます。

説明ばかりではイメージが付きにくいでしょうから、いま、僕が担当している講義「現代と真宗」の内容をお話しましょう。そこで実際に「現代臨床」を実験的に行っていますので、さわりだけお話します。この講義は、二回生以上が受講可なので、これから現代臨床コースへ進みたいと考えている方は、必ず受講してください。これを受講しな



がら、コース内容を把握してもらえればと思います。何をこの授業でやっているかというところ、いくつかのトピックを取り上げて議論をしていたでいます。だいたい半期で三つほどを取り上げるでしょうか。やり方はこうです。最初の二回ほどの講義で、私からトピックの内容を説明しています。課題、問題の発端を詳しく説明します。今やっていますのは、アメリカで起こったキリスト者によるテロ行動です。ある事情のなかで牧師たちが破壊活動を行って逮捕されたのですが、その問題を取り上げて議論してもらっています。本来は平和を求める宗教家が、反社会的活動、破壊行為を行うわけです。しかもそれは、もちろんキリスト教の信仰が彼らにとっては強い動機となっているわけです。宗教的信念がエスカレートして、破壊行為にまで発展しているのです。二回の授業でその内容を講義しますので、受講生はまず、事件の内容を注意深く理解してもらうことになります。特に重要なのは、行為者の宗教的動機ですね。信仰がなぜそのような行為に至るのか、そこからじっくり学んでもらいます。この場合キリスト教の牧師ですので、キリスト教の基礎を勉強します。『聖書』を読み、なるべくじっくりと理解してもらいます。そして事件について、ディスカッションです。班に分かれての議論を行います。これも二回から三回分の授業を使います。議論ではいくつか確認のステップがありますが、まずはなるべく正確に事件を把握することになります。信仰と行動とがなぜ結びついていたのか、はじめに理解を深めてもらいます。一番大切なのは、相手の宗教的動機です。次に、そしてそれに対して自分たちがどのように考えるのか、意見を整理してもらいます。宗教的動機が理解できれば、ある程度の共感も生まれてきてしまうわけです。ですが、共感でとどまれば、その後は共犯となります。ですから、理解可能な点と理解不可能な点を整理していくことになりますね。そして、自分たちは直感的にそれに対してどう考え、発言あるいは行動するのかを議論します。それが第二のステップです。そして最後が、仏教の立場から、あるいは真宗的にはどのように発想し発言することになるのかを議論してもらいます。真宗的思索の中から事件を見直すこともあって、事件から真宗の思索が見直されることもあるでしょう。相互に思索は動いていくようです。そして最終回は、相互発



表です。とにかく練習ですので、今の授業ではこのような流れで議論を進めています。スタートとして宗教テロを扱っていますが、次のテーマは生命倫理の問題に入っていきます。

私の授業「現代と真宗」では、私がテーマを決めています。実際の現代臨床コースの演習では、皆さんが主体的にテーマを選ぶことになると思います。現代という時代において、私たちが臨床すべき課題は何でしょうか。真宗教団が取り組んでおられる課題を見ましても、いろいろ重要なものが挙げられますね。死刑制度や原発問題、差別や反戦問題など、さまざまに現代臨床が動いています。高齢化社会や過疎化という重要な問題もあります。例えば死刑制度という問題について扱う場合にも、自分の意見を発する前に、当然これがいったいどのような内容の制度であるのか、さまざまな視点から検討していかなくてはなりませんね。歴史的にどのような議論されてきたのか、世界的な動向なども知る必要があるでしょう。問題を整理していかなくてはなりません。ひとつの社会的課題をきちんと捉える基盤を作らないといけません。その上で、自分たちの意見の整理がはじまります。一人の人間として、どう考えるのか。これについては、それぞれに意見はあるはずですが、まずそれを出します。しかし大切なのは次です。では仏教という立場、あるいは真宗という態度の上でどのように応えることになるのか、ということですが、これは実は、自分が直感的に持った意見と、違う場合が当然あります。自分がこうありたいと考えたものと、仏教の流れ、あるいは真宗の中で導きだされる結論とが異なるかもしれません。個人的には被害者感情にたつて死刑制度に反対できないけれども、仏教的には反対せざるを得ないなど、議論がそのように進むかもしれません。とにかく最終的には、真宗学科の現代臨床コースですので、真宗という流れのなかで問題について議論していきたいと思っています。

冒頭に言いましたが、このような学びは何も突然に始められるわけではありません。現にこのような関心からの卒業論文テーマは、これまでもいくつかありました。私のゼミでも、反戦問題や差別、死刑制度が取り上げられたことがあります。ですから、そのような視点での学修をコース立てして、しかも方法論をきちんと確認しながら進めていき

ましようというのが、新しくはじまる現代臨床コースです。

何度も申し上げますが、このコースでは、やはり仏教や真宗の基本的な思索ができなければなりません。その上で、現代を見つめる。学修を両輪のように働かさなければなりません。そのことが可能であろうという人は、現代臨床コースを選んでいただければいいのかと思います。

真宗に学びつつ現代に学び、現代を学ぶ中から真宗を学ぶ、最終的にはそのように演習が動いていくことが理想ではありますが、そのあたりも模索しながら一緒に学びを深めていきたいと思います。

## 国際コース

司会…山田恵文先生

木越先生どうもありがとうございます。続きまして、国際コースの説明を井上先生お願いします。

国際コース…井上尚実先生

それでは思想探究コース、現代臨床コースに続いて、三番目の国際コースについて概略を説明させていただきます。最初に主任の加来先生の方からも、それから一楽先生にも触れていただきましたが、中には「英語」と聞くとそれだけで拒否反応が出てしまう人もいるのではないかと思うので、はじめに英語の問題についてお話しします。国際コースでは英語を通して学ぶということはありますけれども、英語を勉強するコースではありませんので、その点を過度に心配しないでいただきたいと思います。コースの大事な点は、お手元のプリントの説明のところをちよつと読んでみますが、「世界の国々との関係が緊密になる現代において、他の宗教や思想・文化と向きあいながら、浄土真宗の立場から対話できる人物をめざします」ということです。そういう目標をもって「英語で仏教・真宗の学びを進め」

ます。「将来、外国の大学院に進学」あるいは、「海外開教に従事することに必要な力」、そうした基本的な力を身につけることが、国際コースの概要として掲げられています。ただここで注意していただきたいのは、学部・国際コースを卒業しただけで、海外へ行って英語で浄土真宗、親鸞の思想についてペラペラと説明できるようになるということとをイメージして期待されても、それは現実的には無理です。私自身、中学から英語を勉強して、大学・大学院でも勉強し、その後アメリカに留学して二十年以上もたちますが、いまだに親鸞聖人のお考えになったことを英語で海外の人に分かるように伝えるということは本当に難しいことで、それは一生の仕事として考えるべきだと思っています。その一番基礎になる部分を身につけ、どういう学びを進めていけばいいのかということを掴んでいただくのがこの国際コースです。そうした歩みの出発点になる基礎的なコースです。

「こんな人におすすめ」というところに、「真宗とともに世界のさまざまな宗教思想を学びたい人。外国へ進学したり、グローバルに活躍したい人」とありますが、これは理想でありまして、今回初めてこういうコースができるわけですので、かなり高い目標が掲げてあります。これを讀むと、自分はこれには当てはまらないと尻込みしてしまうかもしれませんが、少しでも英語を通して外国に通じるような観点から親鸞聖人の教え、浄土真宗を考えてみたいという人に、前向きに選択していただければと思います。

国際コースの「国際」という言葉の意味ですけど、英語だとインターナショナル (international) ということです。が、それは国家や民族を超えて、日本あるいは日本人という狭い枠を超えて、世界的、グローバルな視野で学ぶ姿勢をあらわしています。だから別に英語でやらないといけないとか、フランス語・中国語でやらないといけないとか、そういう外国語能力を中心に行っているわけではありません。姿勢の問題として、日本にとらわれず、そういう国家や文化の枠組みをこえて広く考えようとする視座を示しています。親鸞聖人の教えを讀んで現代の私たちが受けとめるときに、やはりそういう普遍的・世界的な視点から受けとめていくことを大切にします。

親鸞聖人は本願念仏の教えを「誓願一仏乘」と表現されます。一回生の演習を通して『浄土の真宗』の中でも学ばれたかと思いますが、一つの大きな乗り物であるということは、ある特定の民族とか、ある特定の集団にだけ当てはまる、そういう教えではありません。誰も排除することなくみんなが乗れる一つの乗り物ですから、そういうユニバーサル (universal)、普遍的な観点が重要です。親鸞聖人の教え、浄土真宗の普遍性はどこにあるのか、そこがやはり大事な点だと思いますので、そういう関心から探究していく。そのような姿勢を国際コースという名前は表しています。

言葉の問題について英語が中心になるのは、別にイギリスやアメリカが何か文化的に偉大だとかそういうことではなく、たまたま現代の歴史的状況のなかで英語が国際語になっているわけです。国際的な場では中国の人も英語を話すし、韓国の人も英語を話すし、ブラジルの人もポルトガル語を話せない人とは英語で会話します。要するに国を越えたコミュニケーションのための言語、世界の共通語として一番普及しているという点で、英語への翻訳が現代世界で意味をもつのです。そのような英訳された真宗テキストを学びに用いるということです。英語が特別というそういう意味ではありません。

真宗の専門的な用語が英語に翻訳されたらどうなるだろうかということを調べながら、なんでそのような表現になるのかということを考えます。それを通して教えの広さや深さを味わい、みんなで考えて議論します。ですから英語の能力よりも英語で表現されている内容のほうを的確に受けとめる力が問題になるわけです。演習でやっていくことは、現在も「真宗学特殊演習5・6」(欧文仏典講読)という授業があつて、英訳された『歎異抄』を読んでいますけれども、基本的にそれ以外にあまり難しい本を読むということではありません。演習では『歎異抄』の英訳を、それとも大谷派の碩学坂東性純先生による英訳をテキストにして読みます。ここに持つてきましたが、仏教伝道協会の大蔵経英訳事業(二百年くらいかけて『大正大蔵経』を英語に翻訳していく壮大な計画)の中で『歎異抄』の英訳につ

いては坂東先生とハロルド・ステュワートの英訳が採用され、一九九六年に出版されているのです。それを中心に読んでいくということになります。この他にも『歎異抄』の英訳はすでに多くの訳が出版されていますが、大谷派を代表する英訳として坂東先生のものを中心にして、適宜その他の英訳も参照しながら読んでいきます。現代日本語訳も沢山出版されていますから、英語の難しさについては原文（古文）とそれから現代日本語訳を参照することで補っていくことが可能です。どうして英語ではそのような表現になるのか、坂東先生は何を伝えようとしてそういう訳をされているのかということを考えながら読んでいきます。

日本語原文については大谷派の『真宗聖典』に入っている『歎異抄』を用います。またインターネット上には『大正大藏経』データベース（SAT）に入っている『歎異抄』もあり、それも参照〈<http://21dzkl.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php>〉できます。これは実際に試していただければいいかと思えますけれども、SATのデータベースで「歎異抄」と検索すると、その原文テキストと一緒に、パラレル・コーパス（parallel corpus）として、仏教伝道協会の英訳大藏経の坂東先生の英訳が同一画面に表示されるようになっていて便利です。さらに現在大谷大学で研究会をして坂東先生の英訳からの現代日本語訳を準備していますので、近い将来、その現代日本語訳も同一画面で読めるようになるかもしれません。語学にあまり自信がなくてもそうした便利な道具を使えば、あまり心配する必要はないように思います。

それではここで、実際に『歎異抄』のなかから思想的に特徴のある文章について坂東先生が非常に工夫して訳されているところを具体的に原文と英訳を挙げて説明してみたいとおもいます。先ず第一章冒頭の有名な文です。

一 弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。  
（『真宗聖典』六二六頁）

At the very moment when we are moved to utter the *nenbutsu* by a firm faith that our rebirth in the Pure

Land is attained solely by virtue of the unfathomable working of Amida's Original Vow, we are enabled to share in its benefits that embrace all and forsake none.

Shojun Bandō, Harold Stewart, *Tannishō: Passages Deploing Deviations of Faith*, p. 3.

親鸞思想の基本になる教えの言葉ですけれども、この英訳は At the very moment (「まさにその瞬間に」)、原文の「すなわち」というところが冒頭に出ています。「その瞬間に」というのは時を表す副詞句です。どの瞬間かという when we are moved to utter the nenbutsu 「私たちが念仏を称えようというように心を動かされるその時」です。ここで注意していただきたいのは、真宗の信心を、自分がお念仏するときの在り方をどうやって英語で表現すべきか、坂東先生がよくよく考えて訳された英文だということです。まず「念仏もうす」というように原文では能動態のところを、「念仏をととえるように心を動かされる」we are moved to utter the nenbutsu というように受動態を用いて訳されていることに特徴があります。この move という動詞は「(人の心を) 動かす」という他動詞ですけれども、それを使って「私たちが心を動かされる」という受け身の表現 (be 動詞 + 過去分詞) に直しているのですね。これは自然に出てくる訳文ではないです。坂東先生が英語圏の人に、真宗において「信心が起る」、「念仏もうさんとおもいたつころがおこる」というのは、他力(阿弥陀仏の本願の力)によるのだということを聞き取ってもらえるように工夫された英語表現です。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて」称える念仏、それは他力の念仏である。自分の中に起こることだけれど「私たちのころが動かされる」というように、他力の側面を大切にされた翻訳です。さらに大事な点は、英語にするには主語が必要で、ここでは受け身の主語になりますが、「(「私」ではなくて we (「私たち」) を用いていることです。この「念仏もうさんとおもいたつころのおこる」のは私だけではない。私たちにそういうところを起こさせるはたらきがあるのだと、明確に伝わるように工夫されているのです。

その後の「摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」という主節の英訳にも工夫があります。「利益にあずかる」というのは英語にするのが難しい表現ですが、*we are enabled to share in its benefits* というように受動態で訳されています。動詞の *enable* というのは、最近ではコンピュータ関係でよく使われますが、「可能 *able* にする」という他動詞です。その受け身表現で、私たちは「可能にされる」というのですが、何を可能にされるのかというと、「利益を共に分かちあうこと *to share in its benefits*」です。そういう利益を阿弥陀仏からいただく。「摂取不捨という利益を共に分かちあうことが可能であるようにさせられる」のです。「私たち」を主語にして、受け身で、「分かちあうことを可能にさせられる」と、そういう英語の表現になっています。その後の「摂取不捨」というのがどういう利益かという説明が *that embrace all and forsake none* というようにあります。最初の動詞 *embrace* は、本当に両手を広げて「懷きとめる」という抱擁の動作を表しています。人格的にイメージされる阿弥陀仏の両手が伸びて、あらゆる衆生を懷きとめる形で救済が実現する感じがよく出ています。二番目の動詞 *forsake* は「見捨てる、見放す」という意味で、その目的語の代名詞 *none* は「誰もくはない」という否定の意味になりますから、「すべてを懷きとめて誰も見捨てない、見放さない」という阿弥陀仏の本願の「摂取不捨」のはたらきが非常に美しく表現されていると思います。このように英訳と原文の古文とさらに現代日本語訳とを比べてみると、古文や現代日本語だけでは必ずしもはつきりしないところ、主語が私たちと複数であることや、受け身が他力のはたらきを示し、その力を私たちが受けとる瞬間に私たち自身の在り方に変容が起こることが、この坂東先生の英訳を通すとよく理解できるように思います。そういうことをゼミの演習で調べながら読み、話し合い、「ああここはこういう意味の表現なのかな」という受けとめを共有することができればと思います。

もう一つ、有名な第四章の「浄土の慈悲」に関する文の英訳を取り上げてみましょう。

浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもつて、おもうがごとく衆生を利益するをい



うべきなり。

〔『聖典』六二八頁〕

The true compassion of the Pure Land path consists in calling the *nenbutsu*, thereby quickly attaining buddhahood, and then benefiting all sentient beings with the heart of great compassion and kindness as fully as possible.

*Tannishō: Passages Deploing Deviations of Faith*, p. 5.

この「浄土の慈悲 the true compassion of the Pure Land path」は、先ほどの木越先生の話のなかで触れられていた「社会に関わっていく仏教 socially engaged Buddhism」の大切な在り方を親鸞聖人が示されたものと考えられます。ここに引用した文は非常に解釈が難しいところで、古文の原文では「念仏して」「いそぎ仏になりて」「衆生を利益する」という動作の主語は明示されていません。しかし、共通であることは明らかです。「浄土の慈悲というのは、（１）念仏して、（２）速やかに仏となり、（３）思い通りに衆生を利益することを言うはずである」というこの文は、念仏が慈悲の「かわりめ（転換点 turning point、臨界点 critical point）」となることを語っているのですから、その転換点における主体の変容を表しているものと受けとめられます。「念仏して、いそぎ仏になりて」というところの「念仏して」の英訳は「念仏を声に出して称えつ」という意味で calling the *nenbutsu* です。「いそぎ」の英訳は「それによつて thereby、速やかに quickly」となっています。「仏になりて」は「仏の在り方を成就する attaining buddhahood」というように訳されています。念仏を称える者にこの「目覚めた者の在り方 buddhahood」が速やかに実現するという意味です。その目覚めた者の在り方は、後に続く「大慈大悲心をもって衆生を利益する benefiting all sentient beings with the heart of great compassion and kindness」ということで示されています。大慈大悲心というのは、仏の大いなる慈悲心ですから、念仏することにおいて慈悲の主体に根本的な変容が起こることが表されているのです。英語の訳文全体は「浄土の慈悲」を主語にして、それが「〜に存する、ある」という意味の句動詞 consist in を用い、具体的に（１）calling the *nenbutsu*, （２）attaining buddhahood （３）benefiting all sentient



beings という一連の動名詞の句で表す形になっています。浄土の慈悲は、「(1) 念仏すること、(2) それによって速やかに仏の在り方を成就すること、(3) そして思い通りに一切衆生を利益すること」に存するのです。日本語の解説書などを見ても「念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり」というところは、「即身成仏」ではないとするかどうかという目覚めを表しているのか、本当に解釈が難しいところだと思います。英訳を通して、坂東先生がどのように受けとめて表現されているかということを、みんなでディスカッションできたらと考えています。

もつと基本的なこととして、「南無阿弥陀仏」という六字の名号を英語でどのように表現するべきかという問題もあります。最も一般的には I take refuge in Amida Buddha と訳されています。この take refuge in という句動詞は「南無」の英訳で、「帰依する」とか「拠り所にする」という意味ですけれども、そこに使われている refuge という名詞は「避難所」とか「安全な逃げ場」という意味です。具体的なイメージとしては戦争や様々な苦難のなかでシエルターになるところです。本当に困ったとき、どうしようもない生命の危機に陥ったとき、そこに行けば確実にいのちが護られる。生きていく力がそこで与えられるという、そういう場所が refuge です。それをどこに求めるかという「阿弥陀仏をいのちのよりどころにする」。それを take refuge in Amida Buddha と言うわけです。問題は、「南無阿弥陀仏」の場合、「南無」の主語は省略されていますが、それをどう表すかということです。中国語や日本語は主語を明示しなくてもいいのですが、英語では文法的に誰が take refuge するかを示す主語が必要になります(主語がなければ命令文です)。そこで主語に「私」を入れて I take refuge としますが、そうすると自力的なニュアンスが強くなってしまふ問題があります。先ほど第一章冒頭の「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」という箇所では、他力の念仏であることを we are moved to utter the *nenbutsu* というように受動態で表し、受け身の主語を「私」ではなく「私たち」にしていました。英訳を通して考えることで、このように主体 (subject, agent) や態

(voice) の問題についても深く考えられるかと思っています。

「南無阿弥陀仏」の英訳について、最近はこちらが用いられることの方が多くに思いますけれど I entrust myself to Amida Buddha という言い方もあります。動詞の entrust というのは trust という名詞を動詞化したもので、「信託する、委ねる」という意味です。hence entrust myself というのは「わが身を本当におまかせする」ということとです。誰にかというと、阿弥陀仏にです。北米やハワイのお寺で一緒にお念仏をするときには、「南無阿弥陀仏」をそのまま日本語の発音で Namu Amida Butsu と声に出してお念仏します。意味が分かるように I take refuge in Amida Buddha あるじは I entrust myself to Amida Buddha と声に出して称える場合もあります。

国際コースですから、海外のお寺の様子についても何らかの形で触れる機会をもてたらと計画中です。今日はパウボイントの写真を使って少しだけ御紹介しますが、これはカリフォルニア州バークレーにあるバークレー東本願寺です。木越先生が生まれたお寺ですね。一緒にこういところへ行つて法要に参加できたらと思います。まだ国際コース一期生ですので、フィールドワークでどこまで行けるか分かりませんが、夏休みか春休みを利用して海外の真宗寺院を訪ね、英語でどういう法要が行われ、どういう法話がされているのかというようなことも体験学習できればと考えています。ハワイにもハワイ教区の大谷派寺院があります。これはパロロの東本願寺で、ハワイ大学（マノア校）の近くににあります。ハワイには他にハワイ島ヒロに東本願寺があります。この近くにもハワイ大学のキャンパスがありますね。次の写真が大谷派では北米で一番大きな本堂ですけど、ロサンゼルス東本願寺別院です。できれば海外研修で実際に現地の開教使の先生方やメンバーの人たちと交流し、日曜礼拝に出たり法話を聞いたりして、日系の社会だけではなくアメリカ社会における真宗の現状について考える機会をもてたらと思います。

国際コースの最終的なゴールとしては、現地で英語を母国語として話すような人たちと、お念仏について何か話したいができるような、そういうところまでいけたら素晴らしいと思います。四回生で卒論を書くまでに、その基礎が

身につけば充分ではないでしょうか。卒論については、英語を通して、国際的な視点、普遍的な視点から浄土真宗を学んだことを反映するような卒論を書いていただければいいのではないかと思います。

何度も繰り返しますが、私は英語が苦手だからと、そういう理由で国際コースを選択から外さなくてください。少しでも海外の人と念仏について話をしてみたい、あるいは他の宗教の人と信心について語ってみたい、そういう関心があれば積極的にチャレンジ精神を発揮して、国際コースを選んでいただければと思います。クラーク博士は「少年よ、大志を抱け Boys, be ambitious.」と仰っていますけれど、ボーイズだけでなくガールズも、意欲的に大きな志を持って学ぶことが大切でしょう。多くの人が国際コースを選択してくださることを願っております。

#### 司会・山田恵文先生

先生方どうもありがとうございます。それぞれのコースにおける学びの特色をご説明いただきました。最後に、私から少し注意点を話しておきたいと思っています。

講演の中で、どの先生も仰っていたことなんですけれども、それぞれコースには分かれますが、それはバラバラになって勉強するというわけではなくて、どのコースに入っても真宗を学んでいくことでした。どのコースもきちんと親鸞聖人の教えを通して真宗を学んでいくということ、まずここが基本であるということを忘れないでいただきたいと思います。そして、どのような課題関心から、どのような視点から真宗を学んでいくことによって、三コースに分かれていくことになります。ですので、これからどのように真宗を学んでいくのか、各自の課題を明確にしているためのコース分けであると考えていただければと思います。そして、実際には「真宗学演習」Ⅱ～Ⅳの授業の中で、コースに分かれて学んでいくことになります。

二点ほど注意点を述べておきたいのが、今日、思想探究が一樂先生、それから現代臨床は木越先生、それから国際

コース、先ほど井上先生からお話いただきましたけれども、来年この先生方が「真宗学演習」の授業を担当するということはありません。つまり、来年二年生になってどのコースの授業をどの先生が担当するかということはまだ未定であるので、先ほどの先生方が授業してくれるということではないことです。もしかしたら三年生、四年生のところで教わるということになるかもしれませんが、まずその点、誤解のないように伝えておきたいと思います。

そして、先ほどのお話は、二年生から三年生、四年生、そして卒業論文まで全部含めてのお話ということです。来年、皆さんは「真宗学演習Ⅱ」という授業で、それぞれのコースに分かれて学んでいくわけですが、それでも、「真宗学演習Ⅱ」の内容は共通して『歎異抄』です。来年はみんな『歎異抄』をテキストにして親鸞思想を学んでいきます。

ただ、コースの学びに応じて、『歎異抄』の学び方や取り上げる箇所が異なってくるかも知れません。たとえば、現代臨床コースでは、慈悲の問題を考えるために、第四条を丁寧に読んでいくとすることがありますし、思想探究コースでは、本願、念仏、信心など真宗の基本用語に対する理解を深めるために、親鸞の他の著作を読むことに力を入れることも考えられます。また、国際コースで言えば、英訳の『歎異抄』を参照しながら、『歎異抄』をきちんと勉強して内容を理解していくという学びの特色があるわけですね。

また、現代臨床コースでは、世の中にはいろんな社会問題がありますから、そういう社会問題に理解を深めてもらうために、フィールドワークを実施したり、あるいは自ら調査して発表してもらったりというように、それぞれのコースに応じた課題というものが当然出てくるでしょう。国際コースだったら、もしかしたらハワイに行けるかもしれないという、そういう可能性も先ほど示唆されておりましたけれども、それぞれ特色ある学びができるようにいうことで、これから先生方と一緒に、コースの学びの内容をさらに検討していきたいと思っています。みんなと一緒に、私たち教員とともに、よりよい学びの環境をつくっていききたいと思っています。

それでは、以上で特別講演会を終了します。